

The Jar Pandora : On Elpis

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24267

パンドラーの壺

——エルピスについて——

安村 典子

パンドラーの神話は、数多くのギリシア神話の中でも、とりわけよく知られた物語である。しかし一般的には、この話は重大な誤解を伴って伝えられているように思う。そもそも、パンドラーが天界から持ってきたのは、「壺」であって「箱」ではない。ヘーシオドスの『仕事と日』によると、それは大きなピトス (πίθος, 94 行) であったという。ピトスは葡萄酒などを容れる壺、あるいは瓶を意味する。ところが通常流布している話では、それは間違いなく「箱」であると考えられており、しかも「禁じ手を使う」との意味で、「パンドラの箱を開ける」という常套句まで出来上がってしまっている。この誤解の起源は大変古く、ルネッサンス時代初期のエラスムス (15-16 世紀) にまで遡る。彼がヘーシオドスの『仕事と日』をラテン語訳する時に、πίθος を pyxis (箱) と誤訳したことが原因であるといわれる。

この神話にまつわる誤解は、これに留まらない。むしろ、はるかに重要で、はるかに物語の根幹に属する部分で、大きな誤解が生じているのである。それは、壺の底に残ったとされるエルピス (ἐλπίς, 96 行: 通常「希望」と訳される) の問題である。そこで、エルピスが壺の底に残ったということは何を意味しているのか、そしてエルピスとはいったい何なのか、という問題を考察してみたいと思う。

1. パンドラーの話

まず、この物語の筋を大まかに辿る。パンドラーの話はプロメーテウスとゼウスの抗争に起因する、長い話の帰結部分であり、ヘーシオドスの『神統記』と『仕事と日』の両方に言及されている。しかし『神統記』ではパンドラーの名前は語られず、女 (γυναικα, 513 行)、あるいは娘 (παρθένω, 572 行) とだけ述べられている。この一連の話の発端は、『神統記』に語られている。

『神統記』ではまず、犠牲獣の取り分をめぐる神々と人間の裁定に、プロメーテウスが介入する事から始まる¹。プロメーテウスはゼウスの前に、肉と臓物を雄牛の胃袋で包んだものを置き、人間の前には雄牛の骨を脂肪で包んだものを置いた。ゼウスは外見の良い後者を選んだ後、その中身が実は骨であった事を知って、憤った(535-57行)²。この報復として、ゼウスが人間から火を遠ざけたため、プロメーテウスはフェネルの茎に火種を潜ませて、人間に火を与えた³。ゼウスは人間界に火の輝きを見て、激しく憤った(558-569行)。そこでゼウスは火を盗んだ罰として人間に「女」を与える事を考えた。ヘーパイストスが乙女の形を造り、アテーナーは彼女に美しい衣服と冠を与えた。それは「美しき禍い」(καλὸν κακόν, 585行)として人間に与えられた(570-600行)。

このように、この神話によれば、パンドラーは人類初の女性として造られた。なぜ彼女が「禍い」であったのか、『神統記』では結婚によって男が被る経済的負担と、彼女らがひき起す厄介事を、その理由に挙げている(592-602行)。しかし結婚しない男も悲惨な老年が待っている、と直後に述べられているので(602-7行)、いずれにしても人間(男)の生は悲惨だということになる。この話について『神統記』が語っているのはこの段階までである。

『仕事と日』では犠牲獣に関する裁定のいきさつは語られず、プロメーテウスがゼウスの火を盗むところから話が始まる(42行以降)。パンドラーの話については、『神統記』では軽くふれられただけであったが、『仕事と日』では、より詳しく語られている。火を盗んだ罰として、ゼウスはヘーパイストスに命じて土と水から乙女の姿を造らせた。アテーナーは様々な芸と衣装を、アプロディーテーは美しさと悩ましい恋愛の情を、カリス(優美)とペイトー(説得)は黄金の首飾りを、ホーライ(季節)は春の花の冠を、ヘルメースは偽りと甘き言葉と不実の性格と乙女の声、それぞれ彼女に与えた(57-80行)⁴。エピメーテウスが彼女を受け取り、妻とした。それ以前の人間界には、いかなる禍い、労苦、病気もなかったが、パンドラーが、あらゆる害悪が入っていた壺の蓋を開け、壺の中身をまき散らしたために、数知れぬ害悪がこの世に飛び出した。しかし彼女が壺の蓋を閉じたので、「エルピス」だけが壺の下に残って、外に飛び出なかった。それはゼウスの意図による(βουλῆσι Διός, 99行)ものだった(83-100行)。この結末は通常、世界中にこのようにして害悪が満ちあふれたが、「希望」だけは私たちの元に留まった、と解されている。つまり、禍いと悲しみに満ちあふれた世の中ではあるけれども、私たちは少なくとも希望だけはもっている、と⁵。

2. エルピス

パンドラーの壺の解釈をめぐる、古来、多くの議論が提起されてきた。たとえば、壺にはあらゆる害悪が入っていたのだとすれば、希望は悪しきものと考えべきなのか、あるいはまた、壺には害悪だけが入っていたのか、それとも良きものも一緒に入れられていたのか、などである。すなわち、希望は一般的には良きものと考えられているのに、なぜ害悪の壺の中にエルピスが入っていたのか、という問題である⁶。この問題について考えるためには、まず第一に、エルピスが壺の底に残っていたということは何を意味するのかという事、そして第二に、エルピスとは何か、という問題について考えねばならない。

第一に、壺の底に残ったエルピスについて考えたい。その時の状況を、『仕事と日』は次のように記している。

μούνη δ' αὐτόθι Ἑλπίς ἐν ἀρρήκτοις δόμοισιν
 ἔνδον ἔμεινε πίθου ὑπὸ χεῖλεσιν οὐδὲ θύραζε
 ἐξέπητ' πρόσθεν γὰρ ἐπέμβαλε πῶμα πίθοιο
 αἰγιόχου βουλήσι Διὸς νεφεληγερέταο.
 ἄλλα δὲ μυρία λυγρὰ κατ' ἀνθρώπους ἀλάληται (『仕事と日』 96-100)

そこにはただエルピスだけが、決して壊れることのない住居の中、
 壺の縁の下に残って、扉から外に飛び出ることがなかった。
 雲を集めアイギスを持つゼウスの計画により、
 彼女はそれが飛び出す前に、壺の蓋を閉じたからだった。
 しかしその他の数知れぬ害悪は、人間界に跋扈することとなった。

この壺から害悪が飛び出たときに初めて、人間界に禍いが生じたのだといわれる (90-92行)。つまり壺の蓋が閉まっていた間は、その中に入っていた害悪は外に出る事はできなかったのである。そうであれば、エルピスも壺の中に閉じ込められたのであるから、この世に存在しない、ということになる。これはきわめて単純な論理である。『仕事と日』の記述もそのことを明快に述べている。すなわちエルピスが閉じ込められた壺は「住居」に例えられており、それは「決して壊れる事のない住居」(ἀρρήκτοις δόμοισιν, 96行)なのである。しかもエルピスは扉から外に出る事もできなかった (οὐδὲ θύραζε ἐξέπητ', 97-8行)

と明言されている。物語の論理に従えば、このように壺の中に閉じ込められたエルピスは、パンドラーが蓋を開ける前の壺の中の害悪と同様、この世に存在しない、とヘーシドスは言っていることになる。

今なお多くの人々が、パンドラーの壺の話の結論として、私たちの手に「希望」が残ったと考えているのは何故か。それはエルピスを「希望」と解釈しているからである。確かにエルピスには「希望」という意味があり、そして私たちは間違いなく「希望」をもっている。だから壺に残った「希望」は、私たちの元に残ったことを意味する、と考えられているのである。このような誤解が生じたのは、実は西洋古典学がヨーロッパ社会において発展、継承されてきたことと深く結びついている。紀元313年にキリスト教がローマ帝国の国教として公認されて以来、今日に至るまで約1700年間、ヨーロッパは程度の差こそあれ、圧倒的にキリスト教が支配する世界であった。そのキリスト教の中で、エルピスは常に「希望」を意味し、とりわけイエス・キリストの復活による救済の希望を意味した。新訳聖書、特にパウロ書簡の中では、福音、良き知らせとして、きわめて頻繁に言及される言葉である。このためヨーロッパの人々は、ヘーシドスが言及するエルピスも、何の疑いもなく「希望」と理解してきたのである。これについて疑問を提起した人々もいないわけではない⁷⁾。しかし著名な西洋古典学者でも、少なからぬ数の人々が、パンドラーの壺に入っていたエルピスは「希望」であり、私たちはそれが壺に残ったことにより、「希望」を持つ事が許されている、と考えているのが現状である。

そこで先に述べた第二の問い、エルピスとは何か、という問題に進みたい。新訳聖書以前の古代ギリシア語では、エルピスには、「希望」以外の意味はなかったののだろうか。*Greek-English Lexicon*によれば、エルピスはいわゆる「希望」の他に「未来に関する予測」をも意味する (*LSJ, s.v.*)。つまり古代ギリシアでは、エルピスは未来についての良き事も悪い事も含めた予測を意味していたのである。良き事の予測が「希望」であり、新訳聖書の時代には、この意味だけが「エルピス」の意味として強く意識されるようになったと考えられる。

『イーリアス』には、名詞エルピスの用例はない。しかしエルピスの動詞 ἔλπιμαι (エルポマイ) が、この両者、すなわち良き事の期待と、悪しき事が起こるかもしれないとの予測の、両者の意味で用いられている好例がある。

τό μιν οὐ ποτε ἔλπετο θυμῷ

τεθνάμεν, ἀλλὰ ζῶν ἐνιχρῖμφθέντα πύλῃσιν

ἄψ ἀπονοστήσειν, ἐπεὶ οὐδὲ τὸ ἔλπετο πάμπαν,

ἐκπέρσειν πτολίεθρον ἄνευ ἔθεν, οὐδὲ σὺν αὐτῷ· (『イーリアス』 17.404-7)

彼 [アキレウス] は、彼 [パトロクロス] が死んでしまったとは心にも思っていなかった (予測していなかった)。むしろ城門の近くに達した後に (パトロクロスは) 無事に戻ってくるものと思っていた。なぜなら彼が、自分 [アキレウス] の助けも受けずに、あるいは自分が共に戦ったとしても、いずれにせよ [トロイアの] 国を滅ぼせるだろうとは予測していなかったからである。

404 行の ἔλπετο は、親友パトロクロスの死を予測しているので「良き希望」ではあり得ず、「将来起こるかもしれない悪しき予測・予見」である。他方 406 行では、パトロクロスによるトロイア征服の予測であるから、アキレウス自身その可能性を否定してはいるものの、予測それ自体としては、「良き事の予測」を意味している⁸。『イーリアス』以外でも、たとえばアイスキュロスは『アガメムノーン』のなかで「恐怖のエルピス」(φόβου... ἔλπις, 1434 行)、すなわち恐ろしい事が起こるかもしれないという予測、という表現を用い、またプラトーンは『法律』でエルピスを「将来起こるべき事への推察」(δόξα μελλόντων, 644C) と定義している。このように古典ギリシアの世界では、エルピスは良き事も悪しき事をも含めた「将来の予測・予見」を意味する、ニュートラルな言葉として理解されていたのである。

したがって、ヘーシオドスが『労働と日』の中で、エルピスが壺の中に残ったと述べたとき、そこで意味されていたものは「希望」ではなく、「未来の予測」、言い換えれば「未来を予見できること」であったと考えられる。すなわち、壺の中には他の害悪と共に「未来を予見できること」が入っており、それはパンドーラーが蓋を閉めたために壺の中に閉じ込められ、永遠にこの世から消え去った、ということになる。確かに私たちはこの話どおりに、未来について定かな事は何一つ、知ることができないのである。

このように考えると、古来多くの議論が戦わされてきた先述の問題、すなわち「害悪が入れられていた壺に、なぜ希望のように良きものが含まれ得たか」という問題が、一挙に解決される。つまり、「未来を予見できること」は、害悪の一つとして、壺の中に入ってい

たのである。事実、私たちが未来について明確な知識をもっているとすれば、それは間違いなく害悪であるといえる。たとえばある時に交通事故に遭うとか、その他未来の諸々の出来事を予め知っていたら、真面目に生きてゆく事はできないであろう。未来の事は何も知らないから、穏やかな精神で生きることができるのである。

アイスキュロスはヘーシオドスの『仕事と日』の成立から約200年後に、この話を主題にした悲劇『縛られたプロメテウス』を作っている⁹。彼は自らの劇作のために、プロメテウス神話を大幅に改造しているので、ヘーシオドスの話とは異なる部分もかなり見られる¹⁰。しかしながら、エルピスが壺の中に閉じ込められたということの決定的な意味は、作品中に明確に映し出されていることがわかる。すなわちアイスキュロスはヘーシオドスが意図していたとおり、エルピスの意味は「予見」であると理解し、それが壺の中に残ったことは、人間には将来を予見することができなくなったことを意味すると、正確にとらえていたのである。その結果、次のような台詞をプロメテウスに語らせている。

Πρ. θνητούς γ' ἔπαυσα μὴ προδέρκεσθαι μόρον.

Χο. τὸ ποῖον εὐρύων τῆσδε φάρμακον νόσου;

Πρ. τυφλὰς ἐν αὐτοῖς ἐλπίδας κατώκισα.

(『縛られたプロメテウス』248-50行)

プロメテウス 私は、人間が自らの運命を予見することがないようにしたのだ。

コロス その病いを癒すために、どのような薬を見つけたのですか。

プロメテウス 彼らの心に、盲目の希望をいれてやった。

このように、人間は自らの運命を予見することができなくなった、とアイスキュロスは告げている。このことこそ、プロメテウス神話の重要なメッセージであることを、彼は正しく認識していたのである。この悲劇では、ゼウスではなくプロメテウスが予見能力を隠したことになっており、それを人間への恩恵として行ったとしている。このことは無論、アイスキュロスによるプロメテウス像と深く関わっているのであろう。この劇でプロメテウスは一貫して人間の良き理解者・保護者であり、人間に寄り添う神として描かれているからである¹¹。

アイスキュロスはまた、予見(προδέρκεσθαι, 248行)とは別に、期待、あるいは空しい希

望 (τυφλάς ἐλπίδας, 250 行) というものがあり、上に引用したとおり、予見の替わりにこれが人間に与えられた、としている。つまり人間は自分の未来を予知することができないが、他方、盲目の希望、すなわち不確かな期待をもつことができる、ということになる。ヘーシオドスも無論、このような意味のエルピスについても言及している。

ヘーシオドスは『仕事と日』の中で、エルピスという語を三度用いている。一つは当該箇所の壺の底に残ったエルピス、他の 2 回は、アイスキュロスが捉えていたような、「実現しない期待」という意味のエルピス、すなわち「空しいエルピス」(κενήν ἐλπίδα, 498 行)そして「窮乏する男に手を差し伸べる事もしない、良からぬエルピス」(ἐλπίς δ' οὐκ ἀγαθή κεχρημένον ἄνδρα κομίζειν, 500 行)である。このようにヘーシオドスは、元来エルピスという語がもつ二つの意味のうち、パンドラーの話では永久に失われた「予見」の意味で、他の二カ所では「期待・希望」の意味で、この言葉を用いているのである。これに対してアイスキュロスは両者を明確に分離して、「予見」の意味では προδέρκεσθαι の語を、「期待」の意味では ἐλπίς の語をあてた。エルピスという語のもつ、このような意味の違いを見逃したために、パンドラー神話にまつわる誤解が生じたのである。

ヘーシオドスの「空しいエルピス」(『仕事と日』498 行)やアイスキュロスの「盲目のエルピス」(『縛られたプロメテウス』250 行)という言葉で表されるエルピスは、人間の期待がいかほど不確かで恣意的であるか、そして希望がいかにはかないものであるかを雄弁に物語っている。古代ギリシアのその後の作品でも、「希望」は空しく、欺くものである、との考えが伝統的となった。たとえばシモーニデース(断片 1.7 W)、ソローン(断片 13-36 W)、ピンダロス(『ネメア祝勝歌』8.45)、アイスキュロス(『ペルサイ』804 行)では、いずれも実現しない希望の空しさが述べられている¹²。

以上に考察したように、パンドラーの物語によって語られているエルピスは「予見、あるいは未来についての明確な知識」を意味し、これは人間界には存在しないこととなった、とヘーシオドスは述べているのである。その事こそパンドラー神話の核心をなす、最も重要なメッセージであるといえよう。

3. プロメテウス

プロメテウスの物語は、『イーリアス』『オデュッセイア』にも言及されておらず、現存する合唱叙情詩のいずれにも登場しない。プロメテウスという神の起源が、どれほど古くまで遡る事ができるのか不明である。シュメールの叙事詩に登場する火の神、ニヌル

タあるいはニンギルシュとの顕著な類似点を指摘する説もある¹³。P.シャントレーヌは、この神の名前の後半部「-メーテウス」が **μηθος* から作られていること、すなわち *μανθάνω*, *μαθεῖν* (学ぶ) と同じ語族に属するとし、*μητις* (智恵)との類比により形成されたとしている¹⁴。H.フリスクは *προμηθεια* (Vorsicht, 予見) という語形を例証として挙げた上で、*προμηθής* の意味を *vorbedacht* (事前に考慮すること) であると説明している¹⁵。このように、プロメーテウスという名前の意味は一見して明白であり、正統的なインド-ヨーロッパ語族の言葉として、語源的に確実な説明をつけることができる。

しかしながら、神の名前の意味や語源が明解であること、このことは、ギリシア神話では実は異例であり、重大な問題を含んでいるのである。J.チャドウィックは、オリュポスの神々の中で、その名前がインド-ヨーロッパ語族に属する事を語源的に説明できるのは、ゼウスだけであるとし (印欧素語 **Dyēus*)、その他の多くの神々は、非ギリシア語系に属する名前であるにもかかわらず、いわゆる「通俗語源説」により、ギリシア語としての意味や由来が考え出され、それが流布している、と述べている¹⁶。たとえばポセイドーン (大地の夫)、デーメーテル (大地の母)、アプロディーテー (泡から生まれた女神) などは、これらの名前に含まれる非ギリシア語系の部分にも、音価の近いギリシア語の言葉を当てて、意味が付与されているのである。更にチャドウィックは、'any account of a god which begins from an explanation of the meaning of his name ought to be treated with grave suspicion' とも記している¹⁷。もし彼の指摘が正しいとすれば、「プロメーテウス」という名前は、語源、意味の両方においてあまりにギリシア語として明白であるために、ギリシアの神としては他と異なる、いわば異様な様相を帯びていると言わねばならない。

では「プロメーテウス」とは何なのか。100年程前のロシヤーの辞書の中で、バップ (K. Bapp) は注目すべき指摘をしている¹⁸。すなわち、「プロメーテウス」は 'ein Beiname' (エピテトン、称号あるいは枕詞) なのではないか、と彼は提案する。「光輝く (アポロン)」や「知恵に長けた (ゼウス)」のような、神に付けられた形容詞である。事実、後の時代には「プロメーテウス」の形容詞形 *προμηθής* (先見の明がある) が、トゥーキューディデース (3. 82) やプラトーン (『ラケース』188B, 比較級) に用いられている。このことから、「プロメーテウス」という語が元来エピテトンであった可能性を窺う事ができ、そうであれば、その言葉が明瞭な意味をもっていることは当然のことと言えよう。しかしそれなら、このエピテトンをつけられた神の、本当の名前は何かであったのか。あるいは、なぜその神の本当の名前が知られなくなってしまったのか。エリーニュエス (復讐の女神たち)

がエウメニデス（慈しみの女神たち）と呼ばれるように、あまりに恐ろしく強力な神であったために、その名を呼ぶのが憚れるほどであったのか。

もしプロメテウスが前述のように、シュメールの太陽神と関係があったとすれば、プロメテウスの神話の中で常に重要な位置を占める「火」は、ゼウスから盗んだものではなく、太陽神としてのプロメテウスが元来所有していたものであったのかもしれない。そしてもし「プロメテウス」が、人間に火をもたらした「ある神」のエピトンであったとすれば、その神の本当の名前は「太陽」に関係しており、おそらく非ギリシア語系の名前であったと推察される。

プロメテウスの弟、エピメテウスは、προ-（前の）に対して ἐπι-（後の）がつけられているとおり、「後になってから知るもの」という名前の神である。彼については、多くの研究者が指摘しているとおり、パンドラーを受け取るためにのみ考えだされた神であろう¹⁹。プロメテウスと対をなす表裏一体の神、プロメテウスの別の顔であり、言い換えればエピメテウスは、プロメテウスそのものに他ならない。

プロメテウスは犠牲獣をめぐる人間と神々の裁定においても、ゼウスの火を盗み出す事においても、人間の側に立ち、人間の利益を守るために行動した。しかし結果的にはそれらの行為はゼウスの憤りをかい、プロメテウスにも人間にも、罰が下される事になった。プロメテウスに与えられた罰は、冷酷な縄によって縛り付けられることであった（『神統記』521-22行）。神々は不死であるから、神にとっての最も重い罰は、縛られる（つまり無力化される）か、あるいはタルタルス（冥界）に放り込まれることである。すなわちプロメテウスは永遠に無力化されたのである。縛られたプロメテウスの、毎日生え出る肝臓を毎日食べに来た鷲は、ヘーラクレスが退治したので（『神統記』527行）、それ以降のプロメテウスは永遠に、ただ縛られ続けるのである。彼はこのように自らの策略が失敗することを予見することができなかった。したがって、確かに「予知の神」プロメテウスは、後になってようやく事の次第を知る神、つまり「後知の神」エピメテウス以外の何者でもなかったのである。

ゼウスから人間に与えられた罰は、壺の中の害悪が世界にまき散らされ、他方エルピスが閉じ込められて「予見の力」が奪われたことであった。人間から予見の力が奪われたのはゼウスの計画（Βουλήσι Διός, 99行）によるものであると、『仕事と日』は語っている²⁰。プロメテウスは先述のとおり、「後知の神」エピメテウスとして、つまり予知の力を失って、縛り付けられた。すなわちゼウスはその意志に基づいて、プロメテウスと人間の

双方に、予知の力を失うという、同じ罰を下した事になる。これは決して偶然の一致ではなからう。パンドラーの神話は、プロメテウスと人間が、同じ罰を下されたことを伝えており、このようにしてゼウスの計画が成就されていったと考える事ができる。

4. ゼウスの計画

ゼウスの計画とは何であったのか。その大いなる計画の一端、プロメテウスと人間に関わる部分を見てみよう。

プロメテウスと人間の関わりは、実に奇妙である。『神統記』においてプロメテウスが登場する話では、必ず人間たちも言及される。そして、人間たちについて語られるのは、プロメテウスの話の中に限られる。すなわち、人類が単独で主人公をなすような話は『神統記』にはない²¹。つまり、プロメテウスと人間は、きわめて深く結びついているのである。

このことは、別の大きな問題とも深く関わっている。なぜプロメテウスは神でありながら、これほどまでに人間の味方をするのか、との問いである。ゼウスを欺いてまで、人間のために有利になるような犠牲獣の分配裁定をし、人間のために火を盗み、その結果自分がゼウスの罰を受けることとなった。なぜプロメテウスが常に人間を助け、なぜプロメテウス神話には常に人間が登場するのか、ヘーシオドスは理由を語らない。

プロメテウスのみならず、彼の一族は人間と深いつながりをもっている。『神統記』によれば、エピメテウスは「最初の女性」を受け入れて、その後人類が生まれたのであるから(513-4行)、彼は「人類の祖先」ということになる。また、『アルゴナウティカ』3.1086の古注によれば、パンドラーと結婚したのはプロメテウスで、彼らの間に息子デウカリオンが生まれたという。デウカリオンはゼウスによる大洪水を箱船にのって生き延び²²、その後、石を後ろ向きに投げて人間を生み出して、人類の祖先になったとの伝説がある(ピンダロス『オリュンピア祝勝歌』9.42-6)。他にもいくつかの異伝はあるものの、共通しているのは、プロメテウスの一族、すなわちプロメテウス、エピメテウス、デウカリオンのいずれにも、人類の祖先であるとの伝承が存在することである。

このような人類の系譜がある一方で、ギリシアには人間は誰によって、どのようにして造られたか、という人類創造神話も存在する。人類創造についての現存する最古の文献はアリストパネースの『鳥』(紀元前5世紀)で、人間は「土から形づくられたもの」(πλάσματα ηηλού, 686行)と言われている。プラトンの『プロタゴラス』によれば、「神々が

土と火と、それに火と土に混ぜ合わせられる限りのものを混ぜて、人間を形づくった」(320D) という。

人類の創造主は誰であったのか。後代のギリシア文学では、プロメーテウスが人間を造ったという伝承が圧倒的に多く見られ、様々な文献にこの話が登場する。初出は紀元前4世紀の新喜劇作家ピレーモンである。彼の喜劇作品そのものは散逸し、題名も伝わらないが、ストバイオスがピレーモンの作からの引用として記している断片 93 に、次のような言葉がある。

… ὁ Προμηθεύς, ὃν λέγουσ' ἡμᾶς πλάσαι
καὶ τὰλλα πάντα ζῶα, ... (fr. 93 1-2 K.-A., in Stobaeus, III 2. 26)

人々が言うところによれば、プロメーテウスが私たちや、他のすべての生き物を造った。

アポドーロスも、プロメーテウスが水と土から人間を造った(1. 7. 1)と述べている。この他、オウィディウス『変身物語』1. 82-8、ユウェナーリス『風刺』14. 35、ルーキアノス『神々の対話』5. 5、ヒュギーヌス『物語』142 など、プロメーテウスを人類の創造者とする文献は数多い。このことから、その話はすでに伝承として定着し、人々に広く知れわたっていたと思われる。プロメーテウスを人類の創造者とする伝承が、どのくらい昔からあったのか、不明である。おそらくダンパーが指摘する通り²³、ピレーモンの紀元前4世紀の時点では、その伝承はすでに人々の間に広く流布されていたとみられ、伝説の起源はこれよりはるかに古いと考えられる。ヘーシオドスの時代、紀元前7世紀ころまで遡れるのだろうか。ヘーシオドスは、この事については何も語っていない。その話を知らなかったのか、あるいは、知っていたにもかかわらず敢えて無視したのか、不明である。いずれにしても多くの伝承の中で確実に言えるのは、プロメーテウスと彼の一族が人類の創造に深く関わっていること、すなわちプロメーテウスが人間の創造者であったか、あるいは彼の一族が人類の祖先となった、ということである。

ヘーシオドスは『仕事と日』のなかで、「五時代の説話」を語っている。これによると第一の種族である「黄金の種族」と第二の種族である「銀の種族」は、「オリュポスの館に住みたもう不死なる神々」によって造られたとされている(110, 128行)。第三の種族以

降の人々は、ゼウスによって造られたと記されている (143, 158, 173d 行)。ヘーシオドスは明言していないものの、このような書き方から、第一と第二の種族は、ゼウス以外の神々によって造られたとみなされていることが推察できる。人類の創造については、『神統記』、『仕事と日』のいずれにおいても、ヘーシオドスの記述には曖昧さが残る。前述のとおり、プロメーテウスの一族か、あるいは彼自身が、何らかの形で人類創造に関わっているという話が後代に広く定着していることから、ヘーシオドスも既にその話を知っていたが、敢えて語らなかったという可能性は強い。このような事情のために、彼の記述には妙な曖昧さが残ったのではあるまいか。

このようにヘーシオドスが、人類創造に関するプロメーテウスの関与を何も語っていないということは、それ自体が重要な意味をもっていると言うべきであろう。つまり、たとえ彼がその話を知っていたとしても、敢えてそれについて言及しなかったとすれば、それには強い理由があったからである。すなわち、その話は『神統記』の趣旨に全く相反する内容だったからであると考えられる。『神統記』の目的は、ゼウスを頂点とするオリュンポスの神々の秩序を確立し、ゼウスが全宇宙の支配者であることを高らかに歌い上げることであった。神々のみならず (世界の構成員としての) 人類をもその支配下に置かねばならないゼウスにとって、人類をプロメーテウスが創造したということは、断じて認めたくない事であったはずである。

人類も含む全世界をゼウスこそが支配していることを示すために、ヘーシオドスは繰り返し、ゼウスを「神々と人間たちの父」と呼んでいる。たとえば *πατήρ ἀνδρῶν τε θεῶν τε* (542, 643, 838 行) や、語順を変えた *θεῶν πατέρ' ἤδὲ καὶ ἀνδρῶν* (47 行)、また *ὁ γε θνητοῖσι καὶ ἀθανάτοισιν ἀναξεν* (「彼は死すべき人間たちも、不死なる神々をも支配する」、837 行) などの表現も見られる。このように、ゼウスが至高の存在であることを誇示するために、彼は人間たちにとっても「父」として君臨する必要があったのである。

この重大な目的のために、ゼウスはプロメーテウスと人間の間に築かれていた深い絆を断ち切る必要があった (とヘーシオドスは考えた) のである。そこで人間の保護者であるプロメーテウスを罰し、おそらくその本当の名前を人類創造の歴史の中から消し去ろうとしたのではないか。それによってプロメーテウスに替わり、自らが「人間の父」となること、このことこそ、ゼウスの計画であったと考えられる。人間に対しても、プロメーテウスがかつて保持していた力である「予見」を奪い取り、プロメーテウスとの分断を謀ったと考えられる。このようにしてゼウスは、真の意味で「神々と人間たちの父」としての地

位を確立してゆき、全宇宙に君臨する事になった、とヘーシオドスは主張しているのである。このように、パンドーラーの壺の中に残ったエルピスと、プロメーテウスの受けた罰は、ゼウスの支配権確立という大いなる計画との関連において考える事ができ、そのことによって、これらの話の意味が明らかとされるのである。

結び

以上に述べたとおり、パンドーラーの壺に残されたのは「希望」ではなく、「予見の力」、すなわち将来起こるべき事を予め知る能力であり、しかもそれは通常理解されているように、私たちの手元に「残された」のではなく、堅固な壺の中に残され、人間界からは永遠に失われたことを意味していると考えられる。

ヘーシオドスにおけるプロメーテウスの話の基本構造は、おそらく彼が創造した人類のために、彼が火を与えてやり、そのためにゼウスから罰せられた、というものであろう。すなわちプロメーテウスが人類の保護者としてゼウスと対決したのは、人類は彼が創り出したものであったからに他ならないと考えられる。

ヘーシオドスはプロメーテウスによる人類創造の話と言及しないため、なぜ神であるプロメーテウスが人間をそれほどまで助けようとしたのか、理由がわかりにくい。しかしそこにこそ、ヘーシオドスの作詩の意図が窺える。すなわち彼には、プロメーテウスによる人類創造の話は伏せておき、プロメーテウスに替わってゼウスを「人間たちの父」とする必要があった。このため、プロメーテウスと人間の絆を断ち切ったのである。これがヘーシオドスの、あるいは言い換えればゼウスの計画であったと考えられる。

予知能力が私たちから失われた事を、ヘーシオドスはゼウスによる計画である、としている。しかしアイスキュロスは前述のとおり、それをしたのはプロメーテウスであり、しかも人間の益のために行った、と改変している。ここに悲劇詩人としてのアイスキュロスの、人間を見る眼の確かさを感じることができるかもしれない。私たちが未来を知る事ができないのは、確かに恵みである。明日死ぬ事がわかっている、今日努力する事は難しい。「盲目の希望」があればこそ、私たちは強く生きることができるのである。パンドーラーの壺の奥底にエルピス - 予見 - が隠されたのは、私たちの人生にとって決定的に重要な意味をもっていたと言えるであろう。

(金沢大学人間社会学域人文学類教授)

注

- 1 廣川洋一訳『神統記』(岩波文庫)では「神々と死すべき身の人間どもが諍いをしていたとこと」と訳されているが、ἐκρίνοντο (535 行: 中動相) は「諍いをしていた」というより、二派に分かれて取り分の「裁定をしていた」「取り決めをしていた」と理解するほうが適切であろうと思われる。この段階では、神々と人間が争っていたとの記述はなく、むしろこの犠牲獣をめぐる裁定以降、これをきっかけとして人間界と神々の世界が分たれた、とみなされているからである。West (1966) ad loc 参照。
- 2 この話は、古代ギリシアの播祭において、神々には犠牲獣を焼いてその(骨の)煙が奉げられ、人間はその獣の肉を食べるとの習慣の、縁起となっている。
- 3 フェネルの茎の内側は、白い石綿状の柔らかな物質で覆われている。これに火をつけると炎を出す事なく、たね火のような状態で火を保つ事ができる。
- 4 このように、神々があらゆる贈り物を彼女に与えたので、パーン(すべてを)ドーラ(与えられた者)という名前がつけられた、との説もあるが、これはいわゆる通俗語源説である。
- 5 たとえば Pucci (1977) 103 は、「壺の中にエルピスが残るようにゼウスが望んだのは、人間が希望なしでは堪え難いような状況にも、何とか耐え忍ぶ事ができるようにと取りはからったのである、と記している。松平千秋訳『仕事と日』(岩波文庫) 97 行の訳注 (p.151) も、同様の解釈を示している。
- 6 『イーリアス』24. 527-33 には、それぞれ善と悪を容れた二つの壺があったとされている。この壺と、ヘーシオドスの壺との関連についても、古来多数の見解が発表されている。それらの主張の分類・解説については Gow (1913) 103; Verdenius (1971) 225-6 を参照。
- 7 たとえば West (1978) ad 96; Most (2006) n.7.
- 8 『イーリアス』における「悪いことの予測」に ἔλπομαι が用いられている例は、このほか 7.353; 15.110; 16.281; 17.239 にも見られる。
- 9 『縛られたプロメーテウス』がアイスキュロスの真作であるのか否か、1856 年に Rossbach-Westphal がこの問題を提起して以来、未だに決着がついていない。本論考では、この問題には立ち入らない。したがって本論考で「アイスキュロス」とは、「悲劇『縛られたプロメーテウス』の作者」を意味するものとする。
- 10 『縛られたプロメーテウス』の劇構成については、Solmsen (1949) 127-30 参照。
- 11 アイスキュロスによるプロメーテウスの人物像については、Griffith ed. (1983) 6-12 他、参照。
- 12 希望に関するその他の文献箇所については、West (1978) ad 250; Griffin (1983) ad 250 が、詳細なリストを提示している。
- 13 シュメールの叙事詩が伝える火の神と、プロメーテウス神話との共通点は、両者とも山中で縛られていた事、猛禽に襲われるところを助けられたことなど。Burkert (1979) 80 参照。
- 14 Chantraine (1968) II. 940, s.v. προμηθής.
- 15 Frisk (1973) II. 599, s.v. προμηθής.
- 16 Chadwick (1976) 86.
- 17 Ibid.

18 Roscher (1908) col. 3033-4.

19 たとえば West (1966) ad 511; Détienne and Vernant (1978) 18; Gantz (1993) 40 参照。

20 『イーリアス』1.5 に言及されている Διὸς βουλή (「そしてゼウスの計画は成就されようとしていた」) が思い起こされる。ヘーシオドスは、あるいは『イーリアス』1.5 を意識していたかも知れない。この問題については、別の機会に論じたい。

21 『神統記』において人間が言及される箇所は多くない。個人が名前をもって語られるのはヘーシオドス本人が自らの紹介をする部分 (22 行) と、ヘーラクレスが 8 回 (289, 315, 318, 332, 527, 530, 943, 951 行) のみである。集的に「羊飼い」が 1 回 (26 行)、「王たち」が 4 回 (80, 88, 82, 96-7 行) 言及される。ヘーシオドスにとって、ヘーラクレスと「王たち」は特別な存在であつたらしく、人間たちは悲惨で貧しい生活をしているが、「王たち」は尊敬されており (80 行)、ゼウスに育てられ (82 行)、賢く (88 行)、ムーサイたちにも愛される幸せな人々 (97-7 行) と称えられている。

22 大洪水神話は、周知のごとく古代世界の各地に見られる。デウカリオンは、『ギルガメシュ叙事詩』のウトナピシュティム、旧約聖書のノア (『創世記』6-9 章) と並び、神が起こした大洪水を、箱船を造る事によって生き延びた英雄である。洪水神話の原型は、おそらくシュメール語版の『ギルガメシュ叙事詩』(紀元前 3000 年紀) に遡るとみられる。

23 Dunbar (1995) 430.

参考文献

Burkert, Walter, *Structure and History in Greek Mythology and Ritual*: Berkeley and Los Angeles : University of California Press, 1979.

Chadwick, John, *The Mycenaean World*, Cambridge: Cambridge University Press, 1976.

Chantraine, Pierre, *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, tome 1-2, Paris: Klincksieck, 1968-1980.

Dunbar, Nan ed., *Aristophanes, Birds*, Oxford: Clarendon Press, 1995.

Détienne, Marcel & Vernant, Jean-Pierre, *Cunning Intelligence in Greek Culture and Society*, tr. Janet Lloyd, Sussex: The Harvester Press, 1978. (Originally published under the title of *Les Ruses de l'intelligence: la Mêtis des grecs*, Paris, 1974)

Frisk, Hjalmar, *Griechisches Etymologisches Wörterbuch*, Band I-II, Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag, 1973.

Gantz, Timothy, *Early Greek Myth: A Guide to Literary and Artistic Sources*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1993.

Gow, A.S.F., *Essays and Studies Presented to W. Ridgeway*, Cambridge: Cambridge University Press, 1913.

Griffith, M. ed., *Aeschylus, Prometheus Bound*, Cambridge: Cambridge University Press, 1983.

Most, Glenn W. ed., *Hesiod, Theogony. Works and Days*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2006.

Pucci, Pietro, *Hesiod and the Language of Poetry*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1977.

Roscher, W.H., *Ausführliches Lexikon der Griechischen und Römischen Mythologie*, III-2, Leipzig: Teubner, 1908.

Solmsen, Friedrich, *Hesiod and Aeschylus*, Ithaca: Cornell University Press, 1949.

—, "The Two Near Eastern Sources of Hesiod", *Hermes* 117 (1989), 413-422.

Verdenius, W.J., "Hesiod, Theogony 507-616. Some comments on a commentary", *Mnemosyne* 24 (1971) 225-31.

West, M. L., *Hesiod: Theogony*, Oxford: Clarendon Press, 1966.

—, *Hesiod: Works and Days*, Oxford: Clarendon Press, 1978.